名古屋柳城短期大学

第４回東日本大震災復興支援
ボランティア活動報告書

2014年度

BY LOVE SERVE
柳城大

協力：被災者支援センターしんち／ふじ幼稚園

目　次

第４回東日本大震災復興支援ボランティア活動について……1
現地活動プログラム
　Ａ日程……3
　Ｂ日程……4
写真で綴る 2014 年度ボランティア
　Ａ日程……5
　Ｂ日程……7
　チーム・パティシエ……9
参加者の感想
　Ａ日程……10
　Ｂ日程……18
あとがきにかえて……30

種蒔き

柳城学院　創設者
マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が
愛と心理と光明との
種子をひと粒手に持って
飛ぶのを止めて考えた。
「これが大きくなったなら、
すばらしい実がなるように、
どこへ蒔いたらよいのだろう」
救い主さま、それを聞いて、
にっこりわらっておっしゃった。
「私のために　その種子を
子どもの心に蒔いておくれ」

第４回 東日本大震災復興支援ボランティア活動について

キリスト教センター　村田　康常

2011年３月11日の、あの東日本大震災は私たちに大きな衝撃と喪失とをもたらし、重たい課題を残しました。あれから４年が経過した今、そのときの鮮明な記憶は、早くも風化しつつあるように思えます。今、私たちが被災者支援において何よりも心に留めておかなくてはならないことは、被災地以外の場所で進みつつあるように思えるこの風化や忘却の風潮に流されそうになる自分を自覚しながら、今なお過ぎ去ろうとしない震災の生々しい現実のなかで生活されている被災者の方々と共にあゆむこと、そのために、繋がり続けることではないかと思います。

2014年度、名古屋柳城短期大学では、被災地の方々と繋がり続ける活動を模索しながら、ボランティア活動を行ってきました。活動の中心はボランティア学生とキリスト教センターの教職員ですが、隣接する日本聖公会名古屋聖マタイ教会の方々や、本学が様々な場面で利用させていただいている洋菓子店「ミシェル・ケーキ」の方々、本学と同じく東北の被災地支援活動を続ける名古屋短期大学保育科のボランティアサークル「みんなに笑顔をとどけ隊」の学生たちをはじめ、地域の多くの方々と繋がり、支えられ助けられながら、被災地支援活動を続けることができました。

今年度の被災地支援活動は、こうして、支援活動を通して本学が地元の方々との交流を深めるという、思いがけない恵みをもたらしてくれました。しかし、何よりも私たちが大切にしてきたのは、遠く離れた名古屋の地にいても被災地の方々と繋がり続けるための継続的な遠隔支援活動を行うことと、限られた時間ではあっても現地に出向いて交流と支援の活動を実地に行う２期間のボランティア交流活動を今年も実現することでした。そして、今年度は、この２つの活動が、いろいろなかたちで有機的に１つに結びついて、豊かな交わりをもたらしてくれました。

今年度の現地での支援活動は、昨年度と同様に２期間に分かれて、「Ａ日程」は８月17日から20日まで、「Ｂ日程」は９月１日から９月４日まで、のべ18名の学生と６名の教員によって実施されました。６月から準備と学習会を行ってきた学生たちにとって、被災地で過ごした４日間がどれほど貴重なものとなったか、この報告書に率直につづられています。私たちの被災地支援活動のモットーとなっている、「震災を風化させない」という言葉は、まず私たち自身に向けて自問しなければならないものだったと、被災地での震災と津波の大きな爪痕と、原発避難地域の方々の現状を目の当たりにして、改めて誰もが実感しました。

震災の風化がすすむ中で、今年度の活動が実際にできるのかどうかと不安になったときもありました。そのようなときに大きな支えとなり励みとなったのは、「リチャード・Ａ・メリット基金」から多大な資金援助をいただいたことでした。困難な状況の中にあっても希望と信仰を失わず人との繋がりを大切にしながら未来を拓いていくという、本学の第４代学長であったメリット先生の志が、基金のみなさまの深い理解と支援を通じて、私たちの被災地支援を力強く後押ししてくださったのだと思います。

被災地と繋がり続ける継続的な遠隔活動は、昨年度からはじまった「チーム・パティシエ」の活動を軸にして行われました。毎月、第２水曜日に「被災者支援センターしんち」のホールで開かれる水曜喫茶「ほっとコーナー」に出すためのケーキを作って送るという活動です。昨年度の７月からはじまった活動は、一度も途切れることなく続けられてきました。「チーム・パティシエ」の中心的なメンバーの多くは、昨年、被災地でのボランティア活動に応募したけれども人数制限のために現地に行くことができなかった学生たちでした。彼女たちは、名古屋にいてもできることをしようと、ほぼ２年間のあいだ毎月、授業時間割の中でごくわずかな空き時間を利用しながら、ケーキを被災地に届けてきました。

もちろん、この継続的な活動は、柳城の「チーム・パティシエ」だけの力によるのではありません。名古

屋と福島での遠隔のキャッチボールを続けるうちに、思いがけず、すぐ地元で新しい繋がりが生まれるということが今年度はたびたび起こりました。実習や現地でのボランティア活動のためにチームのメンバーがどうしてもケーキを作れない月が何度かあったのですが、学生や教職員が困っているとき、名古屋聖マタイ教会や「ミシェル･ケーキ」の方々が無償の支援を申し出てくださって、文字通りボランティアでケーキを作ってくださったのです。ボランティアの支援活動では、支援していると思っている側が逆に支援されることがよく起こると言われますが、むしろ支援する側こそ、その活動を通して支えられ援けられているのだということを私たちはこの出来事を通して実感しました。ここに播かれた繋がりの種をこれからも大事に育てていきたいと思います。

学内の花壇では、今年も、「ふじ幼稚園」でいただいたひまわりの種を育てて花を咲かせるという活動が実施されました。今年は柴田智世先生のゼミ生たちとボランティアサークルの学生たちが世話をしてくれて、かわいらしい小型ひまわり「ビッグスマイル」の花が咲きました。

そして、今年の学園祭シーズンにも、昨年に続いて、新地町の仮設住宅の方々の手づくりの「いちごのストラップ」の販売と募金活動を行いました。ここでも、被災地支援活動を通じて、名古屋の地での新しい交流が開かれました。柳城と同じく名古屋市内の保育者養成の短大である名古屋短期大学保育科の被災地支援ボランティアのサークル「みんなで笑顔をとどけ隊」の学生たちと顧問の野津牧先生から、被災地支援ボランティア学生同士の交流の機会をいただき、その一環として、お互いの大学祭で、被災地支援のための募金活動とグッズ販売を行うことになりました。両大学祭で、学生同士の交流を深めながら、被災地で作られたいちごストラップを販売し、多くの募金を集めることができました。

10月には、大学礼拝の時間に全学の学生・教職員に向けて、被災地支援ボランティア活動の報告会が開かれました。その会場に、「被災者支援センターしんち」の高木栄子さんとともに、夏期の現地ボランティア活動でお世話になった「加藤和子さんと三宅友子さん」が来てくださいました。2人の思いがけない登場に驚き、再会を喜んだ学生たちは、名古屋と福島県新地町との交流を続けていくことを改めて決意したようです。

これらの活動は、学生たちの熱意と取り組みだけでなく、「メリット基金」をはじめ、多くの方々の支えによって成り立っています。特に、被災者支援センターしんち、日本聖公会中部教区センター、日本聖公会東北教区の皆さまには、今年度も引き続いて、多大なご支援とご協力をいただきました。被災地支援活動を通じて、私たちはここに書きつくせない多くのことを学びました。このささやかな活動を支えてくださったすべての方たちと、何よりも被災地のみなさまに、深く感謝いたします。

東日本大震災 復興支援ボランティア　2014　A日程　　名古屋柳城短期大学

	8月17日（日）	8月18日（月）	8月19日（火）	8月20日（水）	
	センターしんち （被災地巡礼）	宿題やろう会 （雁小屋仮設住宅訪問）	宿題やろう会、花火大会 （雁小屋仮設住宅訪問）	ふじ幼稚園訪問	
7:00		朝食	朝食	朝食	7:00
8:00	集合（昼食持参） 【名古屋駅銀の時計】			帰宅準備	8:00
9:00	名古屋発			ふじ幼稚園へ移動	9:00
10:00		雁小屋仮設住宅へ移動	雁小屋仮設住宅へ移動	【保育補助】 ふじ幼稚園	10:00
11:00	東京駅着 東京駅発	【ワーク】 雁小屋仮設住宅 夏休みを遊ぼう・宿題 もやろう会①	【ワーク】 雁小屋仮設住宅 夏休みを遊ぼう・宿題 もやろう会③		11:00
12:00	昼食	【昼食】	【昼食】		12:00
13:00	仙台着 レンタカー手続き 浜吉田着 レンタカー合流			仙台駅へ移動	13:00
14:00		【ワーク】 雁小屋仮設住宅 夏休みを遊ぼう・宿題 もやろう会②	【ワーク】 雁小屋仮設住宅 夏休みを遊ぼう・宿題 もやろう会④		14:00
15:00	センターしんち 【オリエンテーション・被災地巡礼】			レンタカー手続き 駅周辺で自由時間 （夕食買出し）	15:00
16:00					16:00
17:00				仙台発	17:00
18:00				東京駅着 東京駅発	18:00
19:00	夕食	夕食	花火大会	夕食（車中）	19:00
20:00			夕食	名古屋着 解散	20:00
21:00	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想		21:00
宿泊	旅館かんのや	旅館かんのや	旅館かんのや		宿泊

東日本大震災 復興支援ボランティア　2014　B日程　　名古屋柳城短期大学

	9月1日(月)	9月2日(火)	9月3日(水)	9月4日(木)	
	センターしんち 被災地巡礼	ふじ幼稚園	センターしんち・広畑	センターしんち ふじ幼稚園	
6:00					6:00
7:00		朝食	朝食	朝食	7:00
8:00	集合(昼食持参) 【名古屋駅銀の時計】 名古屋発	活動準備	活動準備	センターしんちへ移動	8:00
9:00		ふじ幼稚園へ移動 昼食準備	センターしんちへ移動	【ワーク】 清掃&洗車&草むしり	9:00
10:00	東京駅着・発	ふじ幼稚園【保育補助】	センターしんち【交流会】 茶話会&ミニコンサート 交流を深め，対象者に応じた歌を歌う.	ふじ幼稚園へ移動 【交流会】 制作物を子どもたちへプレゼント	10:00
11:00	昼食(車中)	ふじ幼稚園 【主活動】 各年齢に応じたゲーム等			11:00
12:00		【昼食】	【昼食】	【昼食】	12:00
13:00	仙台着 レンタカー手続き	ふじ幼稚園 【自由遊び】		仙台駅へ移動	13:00
14:00	浜吉田着 レンタカー合流 新地着	帰りの会 ふじ幼稚園 【ディスカッション】 保育現場における実体験を聞く.	【ワーク】 広畑仮設住宅 茶話会&ミニコンサート＆草むしり 交流を深め，対象者に応じた歌を歌う.	レンタカー手続き 駅周辺で自由時間・昼食 (夕食買出し)	14:00
15:00					15:00
16:00	センターしんち 【オリエンテーション・被災地巡礼】 震災体験を心身で感じる.	ふじ幼稚園旧園舎訪問		仙台発	16:00
17:00					17:00
18:00				東京駅着・発	18:00
19:00	夕食	夕食	夕食	夕食(車中)	19:00
20:00	補助保育準備			名古屋着 解散	20:00
21:00	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想		21:00
宿泊	ホテルみなとや	ホテルみなとや	ホテルみなとや		宿泊

写真で綴る

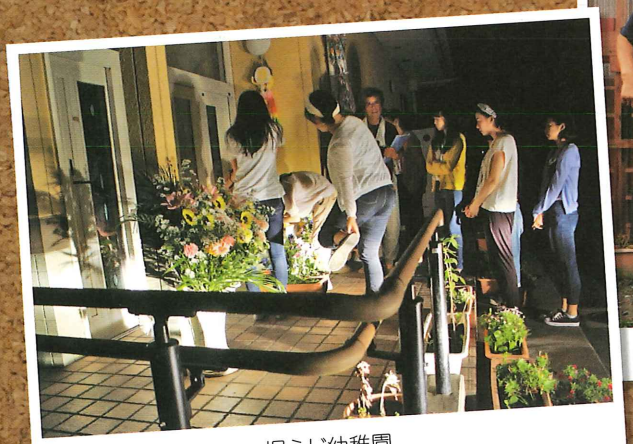
2014年度 東日本大震災復興支援ボランティア

A日程

センターしんちでのオリエンテーション

津波被害にあった市街地の様子

センターしんち



旧ふじ幼稚園

仮設住宅の子どもたちとの関わり

A日程

ふじ幼稚園

B日程

センターしんちでのオリエンテーション

被災地見学

ふじ幼稚園保育活動①

ふじ幼稚園交流会

センターしんちお茶話会

センターしんちにて

茶話会②

仮設住宅にて②

ふじ幼稚園へのプレゼント②

センターしんちにて①

センターしんちにて②

ふじ幼稚園最後のあいさつ

B日程

東日本大震災支援ボランティア

チーム・パティシエ

お菓子作りの様子

現地の方との茶話会

チーム・パティシエ（一部）

東日本大震災復興支援ボランティア報告　2014「A日程」

東北ボランティア感想

学籍番号：26B17　氏名：神戸　祐希奈

私は、東北ボランティアに4日間行って心の中の何かが動きました。

ボランティアに行く前までは、画面越しでしか、見たことがありませんでした。4年たったいまでは、ニュースでさえ取り上げられなくなってきているので、東北の現状を把握できないまま向かうことになりました。実際に現場に行き、話を聞いていると、本当にそんなことがあったのかと、不思議で想像を絶するものを感じました。

1日目は、津波の恐ろしさを知りました。その現場の状況や、その後の状態を生の声で聞き、言葉にできませんでした。その時の私は、想像してみてもそんな状況に陥ったことがないので、涙というより、恐怖感が強く感じられました。

2日目と3日目は、仮設住宅に行き、様々な年齢の子どもたちと遊びました。子どもたちは、3年前に起きた災害を受けたように見えないくらい元気いっぱいでした。遊ぶときには、年齢関係なく年下の子には、優しくしている子どもたちの姿を見たとき、なんでこの子達がこんなに小さいのに想像を絶するようなつらい思いをしなければならなかったのだろうかと思うと言葉にもなりませんでした。夜の花火では、「来年も、この服着てきてね」と、言ってもらえたときは、来年まで、たくさん頑張ろうと思いました。

4日目は、ふじ幼稚園で設定保育を行いました。きちんとした実習は初めてだったので行く前の集まりの話し合いでも想像しにくかったのですが、先輩方の姿を見て乗り切ることができました。シャボン玉は、想像よりも評判がよく、楽しそうにやっている姿を見てとてもうれしくなりました。私は、子どもたちの前で初めて絵本を読みました。すごく緊張もしましたが先輩にアドバイスをもらったり、授業でやったことを思い出しながら、読みました。集中して聞いてくれている姿を見て、読んでよかったと思いました。

保育が終わり、先生方の災害時の話を聞きました。涙しか出ませんでした。子どもや先生を目の前で失うつらさは想像できませんでした。自分が二年後先生になると思うとそんな状況に陥るなんて考えられません。でも、子どもたちが、お礼の歌をくれたとき子どもたちの歌声が心に響きました。

私は、東北に行って本当に良かったと思います。たくさんのことを考えさせられましたが、何より、被災地の方の笑顔を見てもっともっと頑張って素敵な保育者になろう、なりたいと思いました。私は、子どもの安全を守るだけでなく、子どもたちの笑顔を守る保育者になろうと思います。

東北ボランティア感想

学籍番号：26B18　氏名：木戸　捺乃

今回初めて東北被災地ボランティアに参加し、4日間本当に濃い内容で実際に現場を目で見て感じたこと、被災者の方からのお話を聞いて感じたことなど本当に学べたことがたくさんありました。私は東北大震災が起きたあの3月11日、テレビで津波の様子や避難している方々の様子を見て今までずっとボランティアに行きたいと思っていました。なぜなら現場に行かなければわからないことがあるからです。あの日何人もの死者、行方不明者が出て、行方不明者は今でもいます。私は決して東日本大震災を

他人事だと思ってはならないと思っています。同じ世界で起こった出来事であり、私がたまたま東北に住んでなかったから被災に遭わなかっただけなのです。ボランティアを通して改めて自分が毎日幸せに暮らしていれることに感謝しなければならないんだと思い、また今も私に愛情を注いでくれている両親にも感謝しなければならないんだととても強く思いました。同時に自分が幸せに暮らせているからこそ、東日本大震災が起こったことをふとした瞬間に忘れてしまうのだろうと思います。

被災者の方は今でもまだ被災があった日の恐ろしい出来事が夢に出てくるほど苦しんでいる、思い出すだけで胸が苦しくなって涙してしまうほど心に傷を負っていることを、お話をうかがう中で知りました。そして、もし自分がその人の立場だったらと考えたら恐ろしくて身体が震えました。話を聞くだけで自分がそんな状態になってしまうのに、実際に被災に遭ったらなんて想像すらできませんでした。被災者の方は私の想像を超えるような体験をしたのだと改めて知り、現実を精一杯受け止め今を一生懸命生きてる姿を見たら、私が今悩んでることなんてちっぽけなことなんだなと思い知らされました。がんご屋の子どもたちとは2日間接し、子どもたちの様子にとても驚きました。子どもたちははじめ、よく私を睨んだりモノを投げたりとても乱暴だったからです。しかし私が一緒に遊びを始めると「楽しい！」と言って満面の笑みを見せてくれました。「子どもたちの心にはたくさんのストレスが溜まっていてそれをぶつける場所がない、だから他から来た人に当たるんです」と教えてくれたセンターしんちの方の言葉が、子どもたちと接する中で、私の胸に突き刺さりました。本来ならば遊ぶのは自由であり、遊ぶ場所だって自由なのです。でも、被災地の子どもたちは限られた場所で限られた遊びしかできないのです。それでも全力で遊んでいる子どもたち、遊びを教えてくれる子どもたちを目の当たりにして、子どもも一人一人自分たちで現実を受け止めて生きてるんだなと子どもたちの心に秘めている強い力を感じることができました。

ふじ幼稚園へ実際に行き、また実際に園長先生から当時の被災の話しを聞いて、まず一番に「保育者としての自覚」を思い知らされました。なにがあっても子どもを守らなければならない。子どもの笑顔を守らなければならない。今の私のままでは、保育者になっても日常生活の中ですら子ども一人を守れないことに気づき、私はまだ保育者としての自覚がないのだと思いました。しかしそれは当たり前で、その自覚を持つために、今一生懸命保育者に向けて勉強しているのだと私は思います。私はこれから保育者を目指していく上で、このボランティアを通して学んだことを頭に入れて学んでいきたいです。また、来年も東北へ被災地ボランティアに行きたいと強く思います。

被災地ボランティアで感じたこと

学籍番号：25B12　氏名：小川　愛加

私は4日間東北の復興のためのボランティアへ行きました。大学からのボランティアへの参加は初めてでした。

印象に残っていることは、震災当日から現在まであまり復興が進んでいなかったということです。テレビや新聞で復興に力を入れていくという見出しをよく見ましたが、実際に現地へいくと、ガードレールが曲がったままだったり、橋が流れついたままの状態だったりと、私が想像していたものとちがうものでとても驚きました。少しずつですが復興が進み、より住みやすい環境になっていくことを願っています。

また、震災で辛い思いをした子どもたちが笑顔で元気に遊んでいる姿に私自身元気をもらえたことも印象深いです。大きな地震や津波で心に深い傷を負った子どもたちが、輝くほどの笑顔と元気で楽し

く遊んでいる姿を見て、復興はあまり進んでいなくても、子どもたちは少しずつですが心の傷を埋めていき、乗り越えようとする気持ちが見えました。私自身も、少しの嫌なことがあってもくよくよせずに子どもたちみたいに明るく周りを笑顔にできるよう過ごしていきたいと強く思えました。

2回目のボランティア

学籍番号：25B43　氏名：服部　唯

私は8月17日～20日被災地支援ボランティアに参加しました。

ボランティアに参加するのは今年で2回目です。昨年見た光景を思い出しながら、少しでも復興している姿を願い現地に向かいました。1年たった現地を見た最初の感想は“あまり変わっていない”でした。がれきが固められていたりと復興が進んでいるところも少しですがありました。しかし、思っているより進んでいないと思ったのを覚えています。

現地に着いてから1年ぶりにセンターしんちの方々とお会いすることができました。みなさん私たちのことを覚えていてくれ、凄く嬉しかったです。

1日目は巡礼に行かせていただきました。津波が襲った場所を案内していただき、押し流された橋や折れ曲がったガードレールを目の当たりにしました。1年前に見たよりも草が生い茂り、胸が痛くなりました。津波に襲われた幼稚園にも伺い、泥のついたカーテン、穴があいた園舎をみると自然と涙が溢れました。

2日目と3日目はがんご屋という仮設住宅に伺いました。昨年触れ合った子も大きくなっており、1年たったことを感じました。初めての子も多く、最初はカーテンの後ろに隠れてなかなか出てきてくれませんでした。時間がたつにつれ会話も増え、野球やキックベースなど様々なことをして遊びました。私たちも本気を出して勝負をし、笑い声が絶えない時間を過ごしました。午後からは一緒におやつをつくり食べました。最初は食べないと言っていた男の子たちも一口食べると「おいしい！」と言い、おかわりをするほどでした！

2日目の午後から海に案内していただきました。そこには仮と書かれた慰霊塔があり、頑張るなど文字が書かれていました。それを見て胸が痛み、こんな穏やかな海が襲ってきたなんて想像もつきませんでした。海をあとにした私たちはがんご屋に戻り子どもたちと宿題をやったり、遊んだりと充実した時間を過ごしました。夜はみんなで花火をしました。

様々な色に光る花火を見てみんな大喜びをしてくれ、話をしたり追いかけっこをしたり思い思いに過ごしました。楽しい時間はあっという間にすぎ、別れの時間になりました。時間が来ていることはわかっていたけれど、「バイバイ」と声をかけることができませんでした。悲しい気持ちをおさえ「お姉さんたちねもう帰らなきゃいけないの。またくるね」と伝えると子どもたちは悲しそうな顔をし、だっこを求めてくる子もいました。最後の挨拶を終え車に乗ると、みんな最後の最後まで手を振っていてくれました。

4日目ふじ幼稚園に伺いました。1日目に伺った幼稚園の新園舎です。夏季保育ということもあり、少ない園児数でしたが楽しい時間を過ごすことができました。伺った時間がお昼ということもあり、一緒にお弁当を食べました。最初は緊張からかあまり話してくれない子どもたちでしたが、時間がたつにつれ好きなものなどたくさん話してくれました。午後からはお時間をいただきパネルシアター、シャボン玉、絵本の活動を行いました。大きなシャボン玉や小さなかわいいシャボン玉に目をキラキラさせたたくさんの笑顔をみることができました。準備が大変なこともあったけれど喜んでくれてとても嬉しかったです。最後に私たちから歌とひまわりのメダルをプレゼントしました。歌いながら思いが込み上げ泣いている私たちを見て涙を流している子どももいました。短い時間でしたが充実した時間を過ごし

ました。そのあと園長先生から震災がおこった日の出来事を聞かせていただきました。遠くにいる私たちでは意識をしないと忘れてしまう出来事。しかし決して忘れてはいけない出来事。園長先生の話をきいて深くそう思いました。

この４日間泣いたり笑ったり本当に充実な日々を送りました。昨年とは違うことを感じ、復興に対する気持ちが大きくなりました。これからボランティアに参加できる機会は少ないと思います。しかし、あの日のこと、支援する気持ちを忘れず過ごしていきたいと思います。

東北ボランティア

学籍番号：25C08　氏名：内田　英梨子

私は８月17日から４日間、東北ボランティアに行ってきました。一年生の時にも参加し、私自身２回目の参加でした。去年はじめて東北に足を運んだときは、道路は舗装されておらず、子どもが外で遊ぶ姿は見られませんでした。しかし震災から３年半経った今、少しずつではありますが、道路が舗装されたり堤防が作られたりと復興しているように思いました。一日目は、被災地巡礼をしました。そこでは、実際に被災された方のお話を聞くことができました。毎日必死に孫の名前を呼んでも返事がないことの虚しさ、取り残された人の孤独感、津波が引いてから瓦礫の中で行う人探し。私たちは話を聞いたりテレビで見るだけで実際には体験していません。想像するだけでもとても悲惨な出来事だったことがわかります。また、被災された旧ふじ幼稚園にも行きました。先生方は瓦礫や泥水でいっぱいの園バスから園児を助け出そうと必死の思いでしたが、結果園児たちと先生を亡くされました。先生方は自分のことより園児を第一に考え、寒くて凍える園児に気持ちだけでも温まろうと歌を歌い続けたそうです。そこに先生方の心の強さと、園児に対する愛情を感じました。ただ子どもが好きなだけでは務められない職業だと改めて思いました。いざ命の危険に晒されたとき、自分より子どもを優先し行動出来る保育者こそが本当に必要で求められる保育者だと思います。

二日目は、がんご屋という仮設住宅を訪れました。まだ自宅再建されていない方も多くおられますが、少しずつ新しい家を建て仮設住宅から出ていかれる方も多くなってきたと聞きました。中々仮設住宅から出られないことから子どもたちがストレスを受け、暴力的になる子どもも増えている傾向にあると伺ったためどのように接しようか少し戸惑いました。はじめは軽快されて打ち解けられませんでしたが、一緒に遊ぶようになるととても活発でたくさん笑う子どもたちに逆に元気をもらいました。全員でキックベースをしたり野球をしたりと、一緒に過ごす時間が長くなるほど、子どもたちが本当に楽しめて早く安心して暮らせるようになることが一番の願いだと思いました。また、津波が起きた海岸にも行きました。砂浜は貝殻で埋め尽くされており、海はとても穏やかでしたが、波は白ではなく泥の混ざった茶色の波でした。このことから、海の中はまだ泥だらけなのだとわかります。新地町を襲った津波の大きさがうかがえました。ここで亡くなられた方が大勢いると思うととても怖くなりました。そこには木で作られたお墓のようなものがありました。お花が手向けられ、その木には「みんなでがんばろうね」「私たちは元気です」など沢山のメッセージが書かれていました。私たちは残された方の心のケアや、震災を風化させないように多くの人に伝えていくことが大切だと思いました。

三日目も、がんご屋に行きました。みんなでおやつを作って食べたり、夜には花火をしました。子どもたちと過ごす時間はとても楽しく、あっという間に過ぎて行きました。

最終日、ふじ幼稚園を訪れました。事前に準備していた、パネルシアターや、シャボン玉活動、絵本

の読み聞かせは大成功でした。子どもたちはみんなたくさん笑って元気な子たちばかりでした。先生方も被災され、辛い思いをしているのにもかかわらず、丁寧に私たちに当時のことを教えてくださいました。最後に、練習していったsmileという歌を歌いました。子どもたちと先生方のことを思うと歌いながら涙が止まりませんでした。

私たちは子どもと関わる仕事に就こうとしています。どんなときも、子どもの笑顔を守れる保育者になりたいと強く思いました。常に命と隣り合わせの毎日であり、すべての責任が私たちにあります。子どもを守るにはどおしたらよいか考え、いざというときにすぐに行動に移せるよう日頃からの心がけが大切だと思います。また、東日本大震災を風化させないために今自分が出来ることを考え少しでもはやく笑顔になる人が増えることを願います。

被災地の現状

学籍番号：25C34　氏名：高村　万由

8月の半ば、宮城県新地町に3泊4日でボランティアに行ってきました。震災から3年経った今、復興が進んでいる町の様子とともに、今だからこそ直面している問題・課題があることを学びました。

1日目は、現地オリエンテーションとしてセンターしんちの方から震災当日の話を聞いたり、被災地の巡礼をしました。センターしんちでは、映像を見ました。津波が来るまでのさまざまな方の行動を振り替えるような映像で、ほんの些細なことが命取りになったことを学びました。震災当日の話をして下さった方も、津波の様子を携帯に残しておこうとしていたとき、予想を越える高さの津波が来て必死に高台へ逃げたとおっしゃっていました。前にも1度、地震の影響で津波が来たことがあり、それ以上の高さの津波は来ないものだと思っていた方々が多く、過信していたというお話を聞きました。また、私の中でなによりも衝撃を受けたのは、震災関連死での死者が震災の直接的な被害を受けて亡くなった方を大幅に越えているということでした。震災関連死というのは、建物の崩壊や火災、津波など地震による直接的な被害ではなく、その後の避難生活での肉体・精神的疲労が原因で亡くなったり、自殺に追い込まれたりして亡くなってしまうことをいいます。また、震災から3年たった今でも行方が分からず、死亡届が受理されている方々も関連死に入るそうです。震災で多くの方々が亡くなっているだけでなく、関連死という震災に関連のある原因でも多くの方々が亡くなっていることを知り、苦しくなりました。また、これからも増えていくであろう震災関連死者数のことを考えると、引き続き自分の出来ることをしていく必要があると思いました。 巡礼では、車に乗り、実際に津波の被害にあった場所へ行きました。震災から時間が経ち、がれきはほぼ片付けられていました。また、緑が生い茂っており、震災で被災したと言われなければ、初めから緑で溢れている場所なのだと勘違いしてしまいそうなほどでした。しかし、津波でぐにゃぐにゃに曲がってしまったガードレールや津波の跡が残る看板、流された橋や補強工事で高くなった防波堤を見ると、津波の恐ろしさを強く感じました。愛知では、メディアで震災について報道されることは少なくなってきました。復興など、明るい話題を聞くことはたくさんありましたが、関連死など、今だからこそ起きている課題があることを実際に訪れることで学ぶことができました。

2・3日目は、がんご屋という仮設住宅に行きました。子どもたちと一緒に遊び、子どもたちの元気さ、パワフルさに逆にこちらが元気をもらったような感じがしました。子どもたちは震災についての話をすることはなく、元気いっぱい遊んでいました。1人の子が、「こんなにたくさんの子たちと一度に集まって遊んだのは久しぶり。楽しい。」と言っていたのを聞いて、とても嬉しくなりました。3日目の朝には、みんなでお出迎えをしてくれて、「来る

の遅いよ！」と私たちのことを待っていてくれていて、短時間でしたが距離を縮められることができて嬉しかったです。

４日目は、ふじ幼稚園に行きました。１時間ほど時間を頂き、子どもたちとシャボン玉をして楽しむことができました。とても楽しそうな子どもたちの笑顔を見ることができ、良かったです。子どもたちが歌ってくれたひまわりお約束という歌では、一生懸命歌ってくれている子どもたちの姿を見て涙が止まりませんでした。また、園長先生からお話を聞きました。震災当時は、亡くなった園児や先生方がいるのに自分は生きていていいのかということが頭をよぎっていたそうです。ただ、今いる子どもたちのために出来ることをしていかなければならないという思いで、今、保育をしているそうです。園長先生のお話を聞いて、命を預かって保育をするという本当の意味を考えさせられました。東海地方でも、大地震が来るとされています。もし、自分が働いているときに大地震が来た場合、ふじ幼稚園の先生方のような行動が自分にも出来るか、不安になりました。しかし、それ以上に、ふじ幼稚園の先生方のような行動が出来るような保育者になれるように、さらに学びを深めていかなければならないと思いました。

この４日間、1日１日がとても濃く学びの深い日々でした。引き続き、自分に出来ることをしていきたいと強く思いました。

東北ボランティアに行って

学籍番号：25D28　氏名：椎野　真由

私は夏休みに学校で、東北のボランティアに行ってきました。

１日目はセンターしんちというところに行き、実際に被災された方々のお話を聞かせていただいたり、被災した町を１つ１つ説明していただきながら、回りました。お話を聞いていると、被災を受けた方々の苦しみ、辛さを感じ何とも言えない気持ちになりました。お話をして下さる方は、年月が経った今でも、涙が出るほど苦しくて、辛いのだと感じ、被災を受けた町を回って、目に見えている建物など復興は少しずつ進んでいるけれど、震災と津波を体験された方々の傷はまだまだ癒えていないことを実感しました。

２日目と３日目はがんご屋という仮設住宅に行ってきました。現在も仮設住宅で暮らしている子どもたちとスポーツをしたりお菓子作りをしたり宿題を一緒にしました。子どもたちと一緒に遊んでいる時間はとても楽しくて、みんな笑顔が溢れていて、キラキラしていて、素敵な時間でした。子どもたちはみんな優しくて暖かくて、何より団結力がありました。震災や津波と、それに続く原発事故を受けて、怖くて辛い時を一緒に過ごしたからこそ、みんなの絆が生まれて、あんなにも団結しているのだと感じました。

４日目はふじ幼稚園に行ってきました。子どもたちとシャボン玉を通して、関わったり、一緒にご飯を食べたりと、この日もとても楽しい時間を過ごしました。子どもたちからの歌のプレゼントは心に響き、一生の宝物になりました。また、園長先生から貴重なお話を聞かせていただきました。園長先生の苦しみは本当に言い表せれなくて、私が一生をかけても、わかることはできないかもしれません。けれど、周りの人に支えられて、いろいろな言葉、批判を受けながらも、また１から、ふじ幼稚園をつくりあげていて、園長先生の心の強さ、想いの強さに感動を覚えたと同時に、尊敬しました。

４日間、被災地に行き、実際に自分の目で観て、感じて、事実を聴くことができ、貴重な体験をさせていただきました。東北で関わった方全ての人に、感謝の気持ちで一杯です。今自分にできることは、伝えていくことだと思います。年月が経ち、現地から離れていると、あの日のことを、あの日の苦しみを私たちは忘れていってしまいます。それを仕方がないことだと思わず、私は自分の目で観たもの、感

じたこと、聴いたことを家族や友達に伝えていき、少しでも多くの人に知ってもらいたいと思いました。私自身も、被災地に行って感じたことをいつまでも忘れずにいたいと思います。

忘れてない

学籍番号：25D42　氏名：服部　さくら

私は今年の夏休みに４日間東北の復興のためのボランティアへ行きました。大学からのボランティアへの参加は２度目で、東北ボランティアへいくこと自体は３度目です。

１日目には新地町にある支援拠点のセンターしんちで3.11の震災についてのDVDを見せていただいたり、現地の方からお話を伺うことがでしました。そして、巡礼をし、元々教会だった場所や、住宅街だったところ、津波によって園児や先生が亡くなってしまった幼稚園などを見させていただきました。震災前の写真と見比べると橋が流されていたり、家の土台しか残っていなかったりして、津波の威力を感じました。

２日目、３日目には昨年に続いてがんご屋仮設住宅を訪問し、そこで暮らす子どもたちとの再開をはたしました。そこで、子どもたちとスポーツや、おかしづくりをして楽しんだり、夏休みの宿題を手伝うなどして過ごしました。ここで暮らす子どもたちは普段私たちが見る子どもたちと変わりはなく元気いっぱいでしたが、大震災という同じ辛い経験をしていることからか、歳の差関係なく絆が強く結ばれているように感じました。

３日目にはふじ幼稚園という幼稚園に行きました。この幼稚園は巡礼でも行った、津波によって園児や先生が亡くなってしまった幼稚園です。私たちはその旧ふじ幼稚園の新しい園舎へ行き、そこの園児たちとシャボン玉などをして楽しい時間を過ごしたり、園長先生から直接当時のお話をうかがうことができました。

園長先生のお話は去年もうかがったのですが、去年と同様、先生方は当時の悲しい出来事を忘れることなく、亡くなられた子どもたち、先生の想いを大切にして前向きにがんばっておられました。私はその姿に励まされ、この幼稚園で起きた出来事を記憶にとどめ、小さな悩みで悩むのではなく、今の自分の環境に感謝しようと思いました。

今回のボランティアで私が学んだことは、２つあります。

１つ目は、「あの日に起こった震災の体験は誰もが忘れられない記憶となって残っている」ということです。私たちは現地へ行き、たくさんの方から震災の記憶をお話していただくことができました。ある方は、「家に置いてきてしまった孫の名前を必死になって呼び続け、捜索した。自分も死んでしまおうと思った。」とお話してくださいました。またある方は、「避難した場所から見えるところで自分の旦那さん、そして両親が津波に流されてしまった。」とお話してくださいました。私たちは、涙ながらに話してくださる現地の方の当時の記憶を聞いて、涙がとまりませんでした。

被災地で学んだことの２つ目は「震災を忘れてはならない」ということです。 私たちは普段生活しているとき東北の震災のことを思い出すことはほとんどないと思います。実際に、新聞やニュースでも東北に関するものはほぼなくなっていて、仕方のないことなのかもしれません。私たちが現地に実際に行ってみると、建物や瓦礫などは去年と比べて片づいていたり、新しいものが建てられようとしている様子が見られました。しかし、まだまだ東北の復興は終わっていません。なぜなら、目には見えない部分、心の傷はそのまま残っているからです。この心を癒すことはとても時間のかかることだと思います。しかし、まずは私たちが東北のことを忘れずに、悲しい記憶だけれど大切な記憶として残して行くことが、私たちにできることだと思います。

この経験を今回ボランティアに行っていない人に

も伝え、みんなが東北の復興を願えるようになるといいなと思います。

東日本大震災復興支援ボランティア報告　2014「B日程」

被災地の現状を伝えていくという使命

学籍番号：26D06　氏名：伊藤　幸穂

2011年3月11日。ニュースでは地盤沈下の被害に遭った街並みや津波で流されていく家々の映像が流れ続け、私はこれまでに味わったことのない衝撃を受けました。その衝撃が忘れられず、私はその翌年に宮城県へ震災ボランティアに行きました。そして、この大学に入学した後に震災関連のボランティアがあると知り、被災地の現状を改めて知りたいと考え今回の活動に参加しました。

1日目は、センターしんちの方々から当時の津波の状況や現在の復興の様子を伺いました。塩害を受けたであろう場所にも畑が広がっていて一見復興が進んでいるようにも見えましたが、沿岸に近づいていくにつれ建物の土台だけが残された土地が多くなってきました。高台から沿岸の様子を見ると、平らになった土地に9mほど土が盛られていたり、海の様子が見えなくなるほど高い堤防が作られていました。その場所はやがて緑地公園になると現地の方は仰っていましたが、堤防を高くすると海の様子が見えなくなるから危険だとも仰っていました。

2日目は、現地にあるふじ幼稚園に保育活動をしに行きました。現在園に通っている子どもたちのなかには震災当時まだ生まれていなかった子どももいて、震災からかなりの年月が経ったのだと改めて感じました。そして温かで優しい先生方のサポートを受けながら、夏休み期間から用意してきた製作活動を行いました。その後、津波の被害に遭ったふじ幼稚園のこと、そのなかで幼児が津波に流されたり、先生が低体温症で亡くなったことを聞きました。園児たちを目の前で亡くした経験があるから、ふじ幼稚園の先生方が園児たち一人一人をより一層大切にしているのだと感じました。

3日目は、仮設住宅を訪問して、月に一回手作りお菓子を送っているサークル、チームパティシエで作ったパウンドケーキを食べながら、センターしんちや広畑仮設住宅の方と交流を深めました。そのなかで、「生活再建を果たし仮設住宅を出ていく人が増えてきていて、仮設の中で出会った人たちが減ってしまい寂しい」というお話を伺いました。早く被災者の方には生活再建をしてほしいけれど、近所の人が気軽に集まって話し合うことができる心のよりどころが少しでも増えてほしいです。

4日目、名古屋に帰る前にこれまでお世話になったセンターしんちの清掃活動をしました。私たち一年生は、センターしんちで使っている車を新品と同じぐらい綺麗にしよう、と洗車や車内のマットの砂を掃ったりしました。その後ふじ幼稚園に製作活動で作った大きな花火を渡しに行き、仮設住宅でも歌った「Smile」を歌いました。園児たちは園歌と覚えたての手話で「ひまわりおやくそく」という園長先生が作った歌を歌ってくれ、私たちも手話を真似しながら一緒に歌いました。センターの方もふじ幼稚園の先生方や園児たちも、最後はたくさんの笑顔を見せてくれて、被災地に来たときは自分のことしか見えていなかったけれど、最後は現地の方々が笑顔になれるような活動ができて本当によかったと感じました。

今回のボランティアで現地の方からお話を伺うなかで、「震災のことを話すと時間が巻き戻ったような感覚になり、当時の記憶が蘇る」と泣きながらお話をしてくれた方がいました。そのため私は、震災の話を聞くことによってその辛い記憶を思い出させているのではないか、このままお話を聞いていてもいいのかという葛藤を4日間ずっと抱いていました。しかしボランティアが終わった今は、その記憶を打ち明けてくれたからこそ、私たちが少しでも周りの人へ震災や津波がもたらした被害の深刻さ、被災地の現状を伝えなければならないと考えています。そして、チーム・パティシエを通して現地の方との交流を続け、来年もこのボランティアに参加したいと思っています。

東北ボランティアに参加して

学籍番号：26D19　氏名：倉本　美希

9月1日から4日、東日本大震災復興支援ボランティアに参加し、多くのことを学びました。震災が起きてから私は何か支援がしたいとは思っていましたが、なかなか機会を持つことができずにいました。今回初めて被災地を訪問し、直接見たり聞いたりしてテレビなどではわからない震災の本当の恐ろしさや被災者の方々の気持ちを感じ取ることができました。

1日目、仙台駅に到着したとき、私はここで本当に大地震があったのか疑いました。ビルが立ち並んでおり、名古屋とあまり変わらないような景色でした。しかし、電車や車で福島県新地町に向かう途中でがらりと変わりました。山積みになったがれき、曲がったガードレールや木、電信柱が目につき、現地に近づくにつれて初めて見る怖い景色が広がりました。すれ違う車はダンプカーなどの重機ばかりでした。震災から約3年半経った今でもまだ大地震の爪痕が残されており、胸が苦しくなりました。被災者センターしんちに着いてからは、震災についてビデオを見たり、直接2人の方からお話しを聞いたりしました。津波が来た時の生々しい様子、自分の命を守るのに必死な様子がひしひしと伝わってくるお話に心が重くなりました。被災地巡礼では津波により流された跡地を見て、自然の恐ろしさを感じました。海には大きな堤防ができていました。案内してくださった方は見えないのも怖いとお話されました。見た目は復興してきていても被災者の心の見えない傷はなかなか消えないということを感じました。

2日目はふじ幼稚園を訪問し、保育に参加させていただきました。初めて設定保育をやらせていただき、事前準備の大切さや子どもにとってわかりやすい説明をすることの大事さを学びました。ふじ幼稚園の子どもたちは元気で、きちんと挨拶ができて、笑顔が素敵な子たちばかりでした。先生方の保育が素晴らしいから子どもがこう育つのだと思いました。ふじ幼稚園の先生方は目標となりました。園児が帰宅してからは、津波で被災した旧ふじ幼稚園の園舎へ行きました。玄関には亡くなった子どもたちや先生へのたくさんのお供え物がありました。園舎には津波の後が残っていて、震災当日の情景を思い浮かばせました。子どもの命を守る保育者を目指すものとして、旧ふじ幼稚園の様子や園長先生のお話はとても印象深いものでした。

3日目、センターしんちと広畑仮設住宅の茶話会のお手伝いをさせていただきました。来てくださった皆さんと交流したり、一緒にうたを歌ったりしてとても素敵な時間を過ごすことができました。また、名古屋からケーキボランティアで送っているケーキの感想を直接聞くことができてよかったですし、これからもケーキボランティアを続けたいと思いました。広畑仮設住宅では2人の方から色々なお話を伺うことができました。今、新しい家ができてきて、仮設住宅を出る人が多くなり周りの人がいなくなってしまって悲しいという話、地震当日お金が1円もなくて親戚に借りてその場をしのいだという話、避難場所の体育館は仕切りがなくて話がしづらかったという話等たくさんの貴重なお話をしてくださいました。帰り際、「今日は楽しかった」「ありがとう」という言葉をきき、胸がいっぱいになりました。みなさん温かく本当に良い茶話会でした。

最終日は再度センターしんちとふじ幼稚園へ行きました。センターしんちでは送迎用の車を洗い、ボランティアらしいことができたと思いました。ふじ幼稚園では2日目に制作した花火の作品をプレゼントしました。そのプレゼントのお礼に子どもたちが園歌と手話付きの歌を贈ってくれて涙が出ました。

まだたくさん書ききれてないことがあります。そのくらい東北ボランティアの4日間は濃く、1日1日が充実していました。復興ボランティアというプロジェクト名になっていますが、こちらが与えるより与えられたもののほうが多かった気がします。私はこのボランティアで命の尊さについて考えさせられました。また、被災者の方々の気持ちを風化させ

ないようにしなければならないと強く感じました。風化させないためにも現地で感じたことをたくさんの方に伝えていきたいです。この４日間で学んだことは一生忘れません。貴重な体験ができて本当に良かったです。関わってくださったすべての方に感謝いたします。

東北のボランティアに参加して

学籍番号：26D30　氏名：寺本　朱里

私は９月１日から４日まで東北の被災地のボランティアに参加しました。私はそのボランティアに参加して数々の事を考えさせられ、そして学びました。

新幹線で仙台駅に向かい、仙台から拠点となるところまで電車で向かっているときに、車窓から外の景色を見ていると、名古屋駅の近辺と変わらないように思えました。ところが、いきなり仮設住宅が景色の中に見えて、そこで私はここが被災地であることを感じました。拠点となるセンターしんちに到着して、現地のスタッフの人の話を聞いた後に被災地を巡礼しました。スタッフの人の話を聞いているときに、私たちの三年間はあっという間であったけど、現地の人の三年間という時の流れは私たちと感じているものと違うと感じました。被災地を巡礼をしているときにふじ幼稚園の旧園舎を訪問しました。お供え物が置いてある所にノートが置いてあってそのノートを見ると一人の女の子の名前が一週間に一回のペースで書かれていて、毎週訪れていることがわかりました。震災によって天に召されたお友達はいつまでもお友達なんだなとすごく感じました。

二日目はふじ幼稚園で実習をやらせていただきました。その中で園の先生の明るさと子ども一人一人の観察する所がすごく丁寧で、私も自分が保育者になったらこのことを活かしていきたいと思いました。そのあとに園長先生から園の再建についてのお話を聞いて、ものすごい葛藤があったんだろうと私は思いました。

三日目はセンター新地と広畑の仮設住宅での茶話会のお手伝いをさせていただき、そこで現地の人とたくさん触れ合うことができました。色々なお話を聞くことができて、貴重な経験をしました。そのあとで広畑の仮住宅の周りの草抜きをし、現地の人の役に立てたのかなと少しおもいました。

四日目はセンター新地での清掃活動を行い、普段したことのない洗車をして、大変ではあったけどいい経験ができたと思いました。

私はこの四日間を通して名古屋では見ること、体験できないこと、聞くことができないことをして、とてもいい経験をしました。

ビッグスマイル

学籍番号：25A02　氏名：天木　梨乃

3.11の東日本大震災から３年あまり経過した2014年９月１日から４日までの４日間、昨年に続き被災地支援ボランティアに参加させていただきました。

一日目、仙台駅へ到着してから常磐線の電車に乗りました。私たちは、吉浜田駅で降りました。この駅は、現在終点駅となっています。震災により、線路が流されてしまい電車が通ることが出来ないので震災後はこの吉浜田駅が終点駅となったそうです。私たちが訪れた町には、現在鉄道が通っていません。鉄道の復興支援も進んでいようですが、完成するまでにはもう少し時間がかかるそうです。

センター新地に到着して、オリエンテーションを受けました。ビデオを見て、実際に被災にあった三宅さんのお話を聞かせていただきました。ビデオの中には、大きな津波が家や車をのみ込む姿が映っていました。それは、本当に起こったとは思えない光景でした。ビデオを見終わった後には、三宅さんが泣きながら当時の話をしてくださいました。津波から逃げるために高台へ行ったこと、水平線が壁となって迫ってきたとおっしゃっていました。「自分だけ生きていてよいのか」と悩んだそうです。しかし、「生かされた命を精一杯生きる」とだんだん思えるようになったそうです。震災から3年たった今だから当時のことを振り返ることが出来るとおっしゃっていました。

二日目、ふじ幼稚園を訪問しました。クラスごとにお祭りを楽しみ、最後に一つの作品を仕上げることで、園全体が一つであるという実感をすることをねらいとして設定保育を行いました。私は、年少クラスを担当し、新聞プールや魚の制作をしました。事前に色々と準備をしてから本番に臨みましたが、担任の先生に助けられてばかりでした。保育は臨機応変ということを改めて感じました。午後からは、園長先生から、震災から今までの貴重なお話を聞かせていただきました。園が再開されるまで、保護者の方たちはみんなで集まって青空幼稚園を行っていたそうです。新しい園舎が完成して園が再開された時、ほとんどの子どもが戻ってきました。「地域の方々に見守られている」この言葉は、園長先生が何回もおっしゃっていたことです。保育者は、命がけで子どもたちのことを守らなければいけません。保育者を目指す私にとって、ふじ幼稚園の先生方は目標となる保育者像です。

三日目、茶話会とミニコンサートを行い、沢山の方と交流をしました。その中には、昨年に出会った方もいました。また会えてよかったとそんな温かい言葉もかけてもらいました。午後には、仮設住宅の周りの清掃、草取りワークを行いました。「こんなことをしてくれたボランティアは初めてだ。ありがとう。」と沢山の方が喜んでくれました。今年は、昨年現地でワークが出来なかった分精一杯やらせていただきました。

最終日、再びふじ幼稚園を訪れたとき、子どもたちは園歌と『ひまわりおやくそく』を手話付きで歌ってくれました。子どもたちが一生懸命覚えた手話、歌詞の中に込められている想いが伝わってきて、泣きそうになってしまった。

ボランティアに参加して、この震災を風化させないためにはどうすればよいのか、私たちにできることはあるのかということを深く考えることが出来ました。この四日間で沢山の方と出会うことが出来ました。たくさんの笑顔、元気、勇気をいただきました。私も、これから保育者としてたくさんの方にビッグスマイルを届けていきたいと思います。

「一瞬一瞬を大切に」
―今という瞬間は当たり前ではない、幸せなこと―

学籍番号：25A03　氏名：荒川　友美

私は、9月1日から4日の4日間、東日本大震災復興支援ボランティアに参加しました。

3.11が起きたあの日から、私は、自分に出来ることは何かあるのだろうか、力になれることはないのだろうか、とずっと考えてきました。そして、3年半が経った今、被災地に足を踏み入れました。私はこの4日間で、多くのことを感じ、学びました。

1日目は、「被災者支援センターしんち」を訪れ、新地町と山元町の被災地巡礼に行きました。「センターしんち」では、災害当時のお話を聞きました。津波から一緒に逃げた隣にいた人が、気づいたらいない。津波は一瞬で様々な物、人を奪っていったこと。本当に大切な物は何か、と涙を流して話してくださり、貴重な時間を今、いただいているのだと

実感しました。今の自分はどれだけ幸せなんだろう、自分がもし同じ立場になったら……と考えるだけで、胸が痛かったです。お話の中で、これからの子どもたちが安全に暮せるように、という前向きな言葉を聞きました。そのようにして、少しずつ前に進んでいることにも、強さを感じました。また、津波にあった旧ふじ幼稚園と中浜小学校を巡礼した際は、「津波の恐怖」を改めて感じました。私の身長の何倍もの波が、私よりも小さい子どもたちを襲ったのだと考えると、怖く感じました。

2日目は、ふじ幼稚園に行き、設定保育をさせていただきました。私は年長クラスでやらせていただきました。先生方に手伝っていただきながら無事に楽しくやることができました。その後、園長先生のお話を聞きました。子どもたちの遊びの中で津波ごっこや、お葬式ごっこをして遊んでいた、と聞いたとき、強い衝撃を受けました。しかし、その後、お医者さんごっこへと遊びが変わり、子どもたちの遊びが死から生へ、恐怖から治すことへと変化していったと聞いて、子どもたちの中でも前に進んでいることを感じました。

その日の夜のミーティングで、「ボランティアってなにか？」という水落先生からの話を聞き、メンバー全員で考えました。この2日間、私たちはたくさんの貴重な話や、体験をさせていただいていて、受身の状態になっていました。その日は、この答えが出ないまま、終わりました。

3日目は、午前は「センターしんち」での茶話会の中で、広畑仮設住宅や近隣から来てくださった人と学生、先生で、互いにニックネームで呼びあいながら、ボランティアに来る前に作って被災地に届けてあったお菓子とコーヒーを囲んで、お話をしました。震災当時のお話や生活の知恵など、様々な話をしました。ニックネームで呼び合うことにより距離が縮まって、とても楽しかったです。また、ミニ・コンサートも行ない、楽しく歌うことができました。午後の広畑仮設住宅では、ミニ・コンサートが終わった後は、仮設周りの草抜きをみんなでしました。抜き始めると綺麗になっていくのがとても嬉しくて、夢中になって抜きました。抜いている途中で、仮設住宅に住んでいる方から「ありがとう」という言葉をかけてもらいました。その言葉にさらにやる気が出て、普段なら嫌な草抜きがとても楽しかったのを今でも覚えています。また、この一言で3日目にして本当のボランティアをしたと思いました。

4日目の午前中は、3日間お世話になった「センターしんち」での草抜きや洗車などの清掃ワークをしました。草抜きをしているとミミズが出てきました。それを捕まえチャボにあげました。チャボは喜んでミミズを食べていました。そのチャボをよく見ると羽が抜けていて痛々しい姿になっていました。食べ物不足が原因と聞き、心が痛くなりました。午後は、2日目に行ったふじ幼稚園に行き、全クラスが共通して行なった「的当て」でできた花火の絵をプレゼントしました。子ども達が花火を見た瞬間に驚いた顔が、とても印象的でした。子ども達からお礼に園歌と「ひまわりおやくそく」のうたを手話で歌ってもらいました。手話を私たちも子ども達の真似をして一緒にやりました。とても感動した瞬間でした。

この4日間を通して、私は、様々な事を思い、考えました。特に心に残っているのは、ふじ幼稚園の園長先生がお話してくださった中でおっしゃった言葉、「一瞬一瞬を大切に」、「命を守れる保育」という言葉です。今という瞬間を大切に、友だちを大切に、今を生きること。今という瞬間は当たり前ではなく幸せなことであるということ。このことをいつも心に留めて生きていこうと思います。自分が保育者になった時は、自分の判断で子どもたちを危険な目に遭わせてしまうかもしれない。考えるだけで恐いし、避難訓練の大切さに改めて気づきました。子どもたちにも自分の命を守れるように保育をしていきたいです。この4日間の貴重な経験を活かせる保育者になります。

ボランティアを終えて

学籍番号：25A38　氏名：中原　可鈴

2011年3月11日。愛知県でも、震度4の揺れがありました。部活動を終えた私が家に帰ると、テレビで津波の映像が流れていました。怖くてチャンネルを変えたけれど、どの局も津波の映像ばかりでした。あの日のことは今でも覚えています。今年の夏は、そんな東北の地に初めて足を踏み入れました。

仙台駅へ着いたときは、ここがあの東日本大震災が起こった場所なのかと思うほど、名古屋とも変わりのない平穏な都会の光景が広がっていました。しかし車で移動しながら次第に海に近づいていくと、「東日本大震災津波浸水区間ここから」という看板を見つけました。その看板を見て、ここが被災地なんだ、という実感が湧いてきました。

私はボランティアというと、人のために何かを無償で行うことというイメージを持っていました。しかし、今回のボランティアでは私自身が学ぶこと・考えさせられることが多かったです。

被災地の巡礼では、瓦礫がなくなり重機が入って土が盛られている光景を見て、私は復興が進んでいると思いました。しかしそれは、ボランティアで他県から訪れた私だから思えたことでした。被災された方たちから見たその光景は、三年半でまだこれだけしか復興が進んでいない、と映っているのだと思いました。実際に、まだ仮設住宅に住んでいる方もいます。その方が言っていました。家の土台はできているけど建設業者の不足で肝心な家がまだ建っていない……。土台だけ作って一年待っている人もいるようです。その土台に雨水が溜まり、そのまま家を建てたというところでは、屋内にカビが生えてきてしまったそうです。震災からの三年半で、私の生活は変わりました。あのとき高校生だった私は、今は、保育者になるという希望をかなえるために短大に通っています。しかし、被災地での三年半は、生活は大きく変わりましたが、希望に向かっていく良い変化ばかりではなく、まだ止まったままの部分もあります。もしまた三年半後に同じ場所に訪れたとき、未来へのあゆみはどれだけ進んでいるのだろう。

ふじ幼稚園はすごく温かな園でした。園歌と「ひまわりおやくそく」の二曲の歌詞を刻んだ額は、今年完成したばかりのものがホールに飾られていました。その歌詞の額にも、先生方の亡くなった園児や同僚の先生への想いがたくさん込められていて、とても素敵な作品でした。また、幼稚園では子どもたちと活動を行いました。子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができて良かったです。このふじ幼稚園の先生方は、震災の日、園で津波の被害に合われています。子ども、同僚を失った悲しみを直接には感じさせない笑顔が素敵な先生方でした。けれども、先生の中で「ひまわりおやくそく」を歌ってくださっているとき涙を流している方がいました。子どもたち一人ひとりに向き合い、どんなときにも寄り添いつづけて小さな行動ひとつにも目を向けられる、その大きな包容力と笑顔は、子どもたちを何があっても守るという強い決意から生まれている、と感じました。

広畑仮説住宅では「今までこんなことをしてくれるところはなかったよ。ありがとう」と言ってくださる方がいました。このありがとうという言葉は今まで聞いたどのありがとうより、とても重みのある一言でした。

私は多くのことを学びました。そして、学んだことを自分だけではなく、周りの人にも伝えていきたいです。三年半がたち、東日本大震災を遠くに感じている人も中にはいると思います。東日本大震災で起きたことを忘れないで欲しいです。被災地を訪れることはなくても忘れないこと、それもボランティアの一つではないかと思います。

出会いと感謝

学籍番号：25A53　氏名：森　小希子

昨年に引き続き２度目の参加となった被災地ボランティア。

１日目は、まず被災者支援センターしんちで津波を体験された方々のお話を聞きました。震災から３年半たち、私たちの頭の中ではきっと忘れかけていたと思います。しかし被災地の方々は今やっと一歩前に進むことができているとおっしゃっていました。この時３年半前の私たちの思いがどんどん風化していっているということを実感しました。次に被災地をまわる「巡礼」をさせていただきました。昨年はまだがれきの山が残っている状態だったのですが今はたくさんの重機によって片付けられていて、かつて住宅があった場所は高台がある公園をつくっている最中でした。また、津波被害に２度とあわないために海壁をつくる話しが検討されているそうです。海は見えなくなってしまいますが、この地域に住んでいる方々が今よりも安全に暮らすことができるようになると感じました。

２日目は、ふじ幼稚園に行き、設定保育をさせていただきました。まずクラスごとに活動を行い、そのあと４クラスで１つの作品をつくる活動をしました。子どもたちは笑顔で活動をし、喜んでくれて、とてもいい作品になりました。最後にお互いにお礼の歌のプレゼントをしました。午後からは、園長先生と主任の先生から、震災当時のお話をうかがいました。そこで仮設住宅で暮らしている子どもたちもまだいると聞き、あの笑顔からは想像もつかない子どもたちの現実に触れたように思いました。ふじ幼稚園の園長先生と、被災者支援センターしんちでお話をしてくださった方が、共通して、自分が助けることができなかった人がいるのに自分は生きていていいのか、とおっしゃっていました。しかし、その助けることができなかった人のためにも自分もいま生きている人たちと前に進んでいかなければいけない、と園長先生が語られる言葉を聞き、保育者は命がけで子どもを守っていかなければならないと、改めて実感することができました。

そのあとで、ふじ幼稚園の旧園舎を再び訪れました。ここは震災当時のままで波の跡なども残っていました。園長先生は毎朝通い、亡くなった園児11名と教員１名にお話をしにきているそうです。そのお話をする園長先生からたくさんの思いが伝わってきて、子どもたちの心に寄り添える保育者になりたいと思いました。

３日目は、被災者支援センターしんちと広畑仮設住宅で茶話会とミニコンサートを開かせていただきました。茶話会では、学校で私たちが作っていったパウンドケーキを食べながら交流を深めました。その中で、仮設住宅を出るために家を建てる準備をしている人たちはたくさんいるが、大工さんが足りなくて家の土台のみをつくって１年ほどそのままにされている人もいるということを教えてくださいました。また、昨年も参加してくださった女性の方が、昨年したことやお話の内容も覚えててくださり、すごく嬉しかったです。

ミニコンサートでは、私たちが歌う歌に合わせて一緒に歌を歌ってくれる方や、涙を流しながら聞いてくださる方もいらっしゃいました。

４日目は、被災者支援センターしんちと広畑仮設住宅の清掃ワークをしました。全員でボランティアとは何かと考えたときに、「相手に求められていることをすること」という答えが出て、車の洗車をしたり建物の周りの草抜きをすることになりました。後から「このようなボランティアをしてくれた人たちはいなかった」と仮設の方から聞いて、一番しやすいボランティアなのにという感じがしましたが、それが一番大事ということを学びました。また仮設住宅の周りの掃除をしている時に気付いたことがあります。それは、昨年よりも仮設住宅で暮らしている方が少なくなったということです。少しづつではありますが、被災地の現実も着実に変化していると感じました。

この４日間で出会ったみなさんから「ありがとう」「楽しかった」「出会えてよかった」などの、たくさ

んの言葉を頂き、胸がいっぱいになりました。この出会いに、感謝したいと思います。

変化が見られるとはいえ、被災地には、まだまだ復興していない部分がたくさん残っています。これで活動が終わることのないように、私たち自身が、今後の活動に繋げていきたいと思います。

東日本大震災復興支援ボランティアに初めて参加して

学籍番号：25C03　氏名：池田　奈恵

東日本大震災から約３年６ヶ月が経ちました。最近では被災地の様子を新聞やニュースで見ることが少なくなってきたため、被災地に行くまでは正直どこまで復興されているのか分かりませんでした。しかし、実際に行ってみると、自分が想像していたよりもまだまだ復興には時間がかかることを実感しました。

仙台から浜吉田駅に到着し、最初に出会ったのは２人の車掌さんでした。東北を訪れた理由を尋ねられたため「ボランティアできました。」と伝えたところ、車掌さんは、私たちに頭を下げて「ありがとうございます」とおっしゃいました。私はボランティアとして訪れたにもかかわらず、「ありがとう」の言葉に重みを感じ、本当に自分は何が出来るのか、少し不安になってしまいました。

１日目、新地町に着いたとき、被災地の方々は笑顔で私たちを迎えて下さいました。「被災者支援センターしんち」では、新地町を襲う津波の様子を映した映像を見て、被災者ご自身が語られるお話を聞き、震災から現在に至るまでどのようなことがあったのかを学びました。3. 11の話をするたび時間が戻ってしまう気がして話すのが怖いという気持ちや、最近になってようやく当時の自分の行動を思い返し素直に人に話すことが出来るようになったということも話して下さいました。津波が押し寄せてきたとき、自分のことで頭がいっぱいになり、すぐそばにいた高齢者の方を助けることができなかったことを今でも悔やみ、「死」を考えたこともあったと、涙を流しながら心の底に閉ざされていた気持ちを少しずつ言葉にする様子もありました。しかしその方は辛く苦しい体験をされたにもかかわらず、「安全で喜んで住める地域にすることが生き残った使命である」と話しておられ、本当に苦しい中で前向きな言葉を語ってくださいました。私は、想像することができないほどの経験をされた方々が勇気を持って話して下さったことを無駄にしたくありません。そのため、震災を経験していない多くの方々に伝えていき、風化させないようにすることが自分にできることの一つであると思いました。

その後案内していただいた「被災地巡礼」では、車での移動中に、あたり一面雑草が生え、田んぼのような景色を何度か目にしました。しかし、田んぼのように見えていたところは全て、津波により住宅や工場などが流された跡だと聞きました。海から離れている場所でも津波が襲ってきたことを知り、津波の威力や破壊力の強さを全身で感じました。また、ガードレールが傾いていたり、瓦礫の山があったり、被害に遭った小学校の跡地には校内に瓦礫が残されたままであり、時計台や大きな石が倒れたままの状況を目にしました。高台から海を見たとき、私は話を聞きながら3. 11で津波がどのように襲ってきたかを想像しました。想像しただけでも涙が止まらず全身が震えるような思いになりました。被災地の方々は住宅や木材、橋、線路など様々なものが流されるのを目にし、生きる力をなくしてしまった方が多かったのではないかと思いました。しかし、今前向きにいられるのは、周りの人と支え合いながら生きていこうとしているからだと感じました。

２日目はふじ幼稚園に行きました。初めて園を見たとき、私は、園全体がガラス張りであることに驚きました。園長先生も初めはいつも見られている感じがして抵抗があったそうですが、今は「多くの方から見守られている」と前向きに思っていることをお聞きしました。

園に行き最初に目にしたのは、笑顔で元気よく挨拶してくれる子どもたちの姿でした。

保育ボランティアでは、事前に準備してきた活動を行いました。しかし、先生方の支えがなければうまくいかなかったことがほとんどで、ボランティアとしていったにもかかわらず、助けてもらってしまい不甲斐なさを感じました。園長先生には、震災時から現在に至るまでの貴重なお話を聞かせていただきました。震災による辛い体験をされた先生はほとんど園に残っていることを聞き、子どもたちと笑顔で接する中にも、亡くなった子どもや同僚の先生のことが今でも心の奥深くに残っていることを感じました。ちょっとした子どもたちの言葉を丁寧に一つずつ拾い、一瞬一瞬を大切にされている様子からは、今生きている子どもたちとの時間や守るべき命を大切にしようとする気持ちが伝わってきました。私は、そんな素晴らしい先生方の姿を見て、自分も先生方のようにその時々を大切にし、命を預かることに責任を持ち、何事があっても常に子どものことを第一に考える保育者になりたいと強く思いました。

その後、再び訪れた旧ふじ幼稚園では、園長先生の話を聞く前とは全く違った気持ちで訪れました。園庭では、今にも子どもたちの笑い声や楽しそうな様子が見えそうな雰囲気がありました。それは多くの方々にいつまでも優しく見守られているからだと感じました。この日の夜、反省会では「自分にできることは何か。ボランティアとは何か」についてそれぞれ考え、話し合い、次の日を迎えました。

3日目はセンター新地・広畑仮設住宅で「茶話会やミニコンサート」を行いました。私は一年生の時から大学でずっとチーム・パティシエとして被災地にお菓子を作って送る活動をしてきました。今回ボランティアに参加しようと思ったのも、被災地の方と一緒に自分たちが作ったお菓子を食べながら、色々な話がしたいという気持ちがあったからです。茶話会で実際に自分たちが作ったお菓子を食べて「美味しい。いつもありがとう」と、被災地の方の声を直接きくことができて、大変うれしかったです。さらに、今後の参考のために、どんなお菓子があったらうれしいかを聞くことができました。直接被災地に行かなければ聞いたり感じたりすることができなかったことがほとんどで、今回ボランティアに参加することができて、本当に良かったと心の底から思いました。ミニコンサートでは、私たちの歌を聞きながら涙を流している方もいました。年月は変わらず経っていってしまうけれど、その方々にとっては決して悲しみや辛い思いは忘れることのできないものだと思いました。

その後は草ぬきを楽しみながら行いました。被災地の方が「ボランティアで草ぬきをしてくれたのは初めてだ」と言ってくださり、やっとボランティアとしての活動ができたと感じました。

4日目はセンターしんちの清掃とふじ幼稚園に完成した花火の作品を持って行きました。清掃では4日間の感謝の気持ちと今後のみなさまのご健康等を願いながら最後まで丁寧に掃除をしました。幼稚園では、完成した作品を見て子どもたちは嬉しそうな笑みを浮かべ、目を輝かせていました。お別れのとき、私たちの車が見えなくなるまで追いかけながら手を振り続けて見送ってくれました。

この4日間では、言葉にあらわせないほど多くのことを感じました。テレビや新聞で見るのは、ほんの一部であり実際には、今でも震災の爪痕がところどころにみられ、安心して暮らせるには時間がかかる現実が見受けられました。ボランティアに参加していなければ知らずに終わっていたこともたくさんあったと思います。1日目の浜吉田駅で最初に考えさせられた「自分にできること」は、この4日間で多くの素敵な出会いや大震災を経験した方々の話を聞くことによって、いくつか見つけることができました。一つは、今回の経験を自分だけのものにして終わるのではなく、風化させないために一人でも多くの方に伝えていくことです。二つ目は、多くの方を「笑顔」にすることです。三つ目は、自分の夢をあきらめず追い続けることです。私は被災地の方とお話しているときに、将来どんな保育者になりたいかと聞かれました。その時私は、今回被災地で経験した様々なことを踏まえ「子どもたちや保護者の方が安心してもらえるような保育者になりたい」とはっきり答えました。すると、「その言葉が聞けてうれしい。あなたならきっと、そんな先生になれる。応援しているよ」と言って下さいました。その言葉

がとても心に残っています。そのため四つ目は、子どもや保護者の方から安心してもらえるような保育者になることです。以上のことを忘れず、今後も、大学での勉学に励み少しでも目標とする保育者に近づけるよう頑張りたいと思います。

最後に、今回のボランティアで出会った全ての方、ボランティアに参加させていただいた先生方に心より感謝いたします。

2度目の震災ボランティア

学籍番号：25C07　氏名：入江　祐果里

私は昨年、東日本大震災復興支援ボランティアに参加し、たくさんの事を学び、感じました。ボランティアに参加したことで、少しでも多くの人に震災や被災地のことを知ってもらいたい、被災地の方々とのキャッチボールを大切にし、続けていきたいという気持ちが私の中に強くあったので、今年もボランティアに参加しました。

被災地到着後、センターしんちで震災・津波を体験された方々の貴重なお話を聞かせていただきました。被災地巡礼もさせていただき、実際に津波にあった場所を自分たちの目で見てきました。復興は少しずつですが進んでおり、昨年とは景色も違っていました。未だ住宅の跡地だけが残っていたり、瓦礫が残っている光景は変わってはいないですが、トラックが作業をしていたり土が高く盛られていたりしており、目の前に見えていた海もあまり見えなくなっていました。復興してきているとはいえ、3年経ってもまだこれだけなのかと思うと、胸が痛みました。津波を体験された方の、「ここに家があったんだよ」「ここから自分の家族が流されて行くのを目の当たりにした人もいるんだよ」という話を聞き、とても苦しくなりました。ある方は、なぜあの時声をかけてあげられなかったのか、生きられる命が生きられなかったのは自分のせいだから、自分が生きていて良いのかわからないと涙を流しながらも話してくださいました。また、津波が来ていて急いで家に帰ったけれど家族の姿は無く、何度も死のうと思ったと話してくださる方もいました。「死にたい」気持ちと「生きたい」という両方の気持ちがあるため、死のうとしても死なない方法を選んでしまったとおっしゃっていました。話をしてくださる方はどの方も、「何に気持ちをぶつければ良いのかわからなかった」とおっしゃっていました。辛い経験をされているにも関わらず、涙を流しながらも、私たちに津波の事を伝えてくださる姿を見て、私たちは、このことを多くの人に伝え、強く生きていかなければならないと感じました。

2日目、ふじ幼稚園に行かせていただき、時間をいただいて設定保育を行いました。活動は夏祭りをテーマとし、年少・年中・年長それぞれクラスごとで、金魚すくいや魚釣りなどを行いました。また、4クラス合同で的当てを行い、1つの作品を作るという活動も行いました。出来上がった作品をプレゼントすると、子どもたちはとても喜んでくれ、お礼にと歌のプレゼントをしてくれました。子どもたちはとても元気が良く、キラキラした笑顔をしていました。ですがその陰に、辛くて怖い記憶があるのだと気付き、子どもたちの目に見えない思いをしっかりと受け止め、優しく寄り添うことのできる保育者になろうと思いました。ふじ幼稚園では、子どもたちを第一に考えて保育をされていました。その中で、小さな命を守ることの大切さや責任の重大さなど、多くの事を学びました。

3日目、センターしんちと広畑の仮設住宅を訪問し、茶話会とミニコンサートを行いました。ミニコンサートでは、私たちから被災地の方々にプレゼントする歌だけでなく、皆さんと一緒に歌を楽しめるよう昔馴染みのある歌も歌いました。私たちの歌を聴いて涙を流す方、一緒に口ずさんでくれる方、笑顔を見せてくれる方々がいました。言葉では上手く伝えられないことも、歌で伝えることができるのだということを改めて感じました。茶話会では、たく

さんの方々と交流をしながら、仮設住宅での話や避難所の話、お金はどうしていたのかなど、とても貴重な話を伺うことができました。お話をしている時、1人の方が昨年のボランティアの写真を持って来てくださり、「これあなたでしょ？」と笑顔で話しかけてくださいました。「昨年すごく楽しかった」「前はグーパーするゲームをした」と昨年のことを覚えていてくださる方がとても多く、昨年楽しかったからみんなで楽しみにしていたと嬉しい言葉をかけていただくことができました。些細なことではありますが、私たちは少しでも被災地の方々に笑顔を届けることができているのではないかなと感じることができました。また、「こうやってボランティアに来てくださるのが嬉しい」「私たちも皆さんのことを知ることのできるいい機会となる」と言う言葉を聞き、これからも被災地の方々との繋がりを大切にして行きたいと感じました。

最終日、センターしんちで清掃ワークを行い、主に洗車や草刈りを中心として行いました。初めての作業ではありましたが、被災地の方々から「こんなことをしてくれたボランティアはいままでなかった」と言っていただくことができました。また、茶話会には来ていなかった仮設の方々も、作業をしている私たちの姿を見て、声をかけてくださいました。被災地の方々からの「会えてよかった」「ありがとう」という言葉を聞き、一人ひとりが自分に何ができるのかを考えながら行動したからこそ伝えていただくことのできた言葉だと思いました。

この4日間で多くの事を学び、とても貴重な体験をすることができました。その1日1日がとても濃いものであり、考えることもたくさんありました。私は、ある方の「やっと津波のことを話せるようになったが、話すたびに4年前まで時間が戻っているような錯覚がおこる」という言葉がとても記憶に残っています。時間が経つにつれ、自分と向き合いはじめたことで、まだ多くの方が辛い思いをして苦しんでいます。私たちは、立ち止まってしまっている方々に対し、どのようなことができるのか、ボランティアとはどのようなことなのかを考えていかなければならないと思います。被災地に来て、自分の目で見たこと、耳で聴いたことをこれから先少しでも多くの人に伝え、震災があったことを風化させないよう、今後の活動につなげて行きたいと思います。これからも被災地の方々とのキャッチボールを続け、次の世代へと繋げていくことが大切であり、いまの私にできることだと思います。

被災地の方々との出会い、たくさんの学びと経験ができたことに感謝しています。

2014東北ボランティア　報告と感想

学籍番号：25C13　氏名：奥澤　愛

9/1～4の4日間、福島県相馬市をはじめ東日本大震災の被災地へボランティアに行った。

1日目、センターしんちで当時のビデオを見たあと、被災した方々のお話を聞いた。危険だと分かりながらも、家が気になり津波のほうへ向かってしまったことや、自分が逃げることに必死で、近くに住む老人を助けることができなかったこと。避難中の食べ物を買いに行っている間に津波が来て、家族がバラバラになり不安になったこと。不安や、誰かを守れなかったことから自分を責め、このまま生きていていいのか、死にたい、と思ったことなど、辛い当時の記憶や思いをうかがった。その後、新地町をはじめ被災地を巡礼し、津波でさら地になってしまったところや、重機が数多く入り、堤防工事をしているところを見た。漁業がさかえていた町に巨大な堤防が作られ、海が見えなくなるのだと、案内して下さったセンターしんちの方に伺った。また、津波が来たとき屋根の上に避難し、波が引くまではカーテンで子どもに遺体を見せないようにして過ごした小学校も、見ることができた。屋根の下ぎりぎりまで水が来ていたことが水跡で残っており、時計台は倒れ、学校名が書かれた大きな石は土台から3

～5m離れて転がっていた。

2日目、子ども12人と先生1人が亡くなってしまったふじ幼稚園で、午前は設定保育をし、午後には園長先生のお話をうかがった。12人の子どもと1人の先生はすべて津波によるというわけではなく、濡れた体で冷え、低体温障害によって亡くなってしまった方もいるということだった。朝私たちを見かけ、元気にあいさつをする園児たちや、子ども一人一人の声に耳を傾け、丁寧に関わる先生方の保育を見て、こんな保育がしたいと思った。また同時に、辛い経験をしたからこそ一つ一つを大切にできるのだろうかと感じられた。設定保育では各学年ごとにお祭りをテーマとした1時間弱の保育を行い、園全体の活動としてインクを付けたボールを転がす的あてをして、花火を作った。弁当を子供たちと食べた後、園長先生のお話を聞いた。地震の時子どもと教員はどのようにして避難したのか、地震の後どのようにして今の園舎で保育ができるようになったのか、そこに至るまでどのような葛藤や周りからの支えがあったのかをうかがった。その後被災した旧園舎に行き、ガラスや扉が壊れた跡や曲がった排水管、津波で高さ2、3mの所まで波が来たという跡が残っている様子を見た。いまは瓦礫撤去され綺麗になった方だが、初めは地面いっぱいにあったのだという話も聞いた。玄関には当時の園児たちや教員から亡くなった友達に向けて、手紙や千羽鶴、絵本や花が添えられていた。

3日目、センターしんちと広畑仮設住宅へ行き、ミニコンサートと茶話会を開いた。事前に歌とケーキを準備し、一緒に歌い、ケーキでお茶を飲みながらいろいろな話をした。地震のことから他愛無いことまで、たくさんのお話を聞いた。その中で、仮設住宅は小さいので、物資の支援はもうそこまでいらない。できれば人と触れ合う機会がもっとたくさんほしい。というお話を聞いた。どうしてもストレスが溜まってしまう生活環境の中、人と話し、笑うことが何より楽しいのだという。現在仮設住宅に住む人は少しずつ減っているものの、いまだ家が建てられない状況にある方もいた。建設会社が忙しく、なかなか工事が進まないのだそうだ。茶話会の後、広畑仮設住宅の外掃除をし、3日目が終了した。

4日目、センターしんちで洗車と外回り掃除のボランティアをしてから最後のあいさつをし、2日目の設定保育の学年活動で作った花火を、手作りの額に入れふじ幼稚園に贈った。また子どもたちと一緒に、園歌と地震の後作られた歌を歌った。その後仙台駅まで移動し、4日間のボランティアを終了した。

津波の傷跡がいまだ残っている様子や、自分の事で精一杯で近所の人を助けられなかった、家族が亡くなったと思い自分も死にたいと考えた、といった話を聞いて、被災した人たちの思いを間近に感じた。遠く愛知県にいるだけでは感じ得ない気持ちだったと思う。それまで、正直他人事のように感じていた気持ちに触れ、落ち込んだ。それまでどこかで他人事だと思っていたのだが、今回のボランティアで様々な活動をし、当時の話を伺い、想像ではあるものの辛さ、苦しさを共感できたように思う。いつ壊れてしまうかわからない生活の中で、一瞬一瞬を大切にすることの重要性を感じた。もっと早く被災地に訪れるべきだったとも感じた。昨年ボランティアに行った学生や先生方から、被災した方々も少しずつ前向きにこの地震をとらえ、新しい生活を歩みだそうとしていると聞き、より一層その思いは強くなった。今回のボランティアでは、一瞬一瞬の大切さや、臨機応変・柔軟な対応の大切さを感じることが多かった。今回感じ取ったこの思いや、一瞬一瞬の時間を大切にして、保育者として自分にできることを精一杯やっていきたいと思う。

あとがきにかえて

宗教委員：菊地　伸二

2014年の夏、名古屋柳城短期大学による「東日本大震災復興支援ボランティア」が行われた。4回目の実施となる今回のボランティアは、A日程（8月17日～20日）とB日程（9月1日～4日）の二つのグループに分けて行った。両者ともに初日は、名古屋から福島に移動し、日本聖公会の復興支援の拠点であるセンターしんちでオリエンテーションを受けた後に被災地巡礼を行い、その後宿泊場所に向かうという共通のプログラムであったが、2日目からはそれぞれ別のプログラムを走らせることとなった。具体的には、A日程では、主としてがんご屋仮設住宅の子どもたちと2日目、3日目を過ごし、最終日はふじ幼稚園で保育補助をさせていただいたのに対して、B日程では、2日目と最終日はふじ幼稚園で保育補助を、3日目はセンターしんちと広畑仮設住宅で茶話会・ミニコンサートを行わせていただいた。もちろん、プログラム内容には多少違いがあるとはいえ、これらの施設はすべて、東日本大震災後に本学が交わりの機会を与えられたところであるという点では共通している。

今回わたしはA日程のプログラムに参加する機会を得た。その一つに、がんご屋の子どもたちと関わるプログラムがあった。わたしにとっては昨年に続き二回目であった。原発のためにふるさとに帰ることができないでいるご家族の方々が住んでおられるこの仮設住宅では、その生活の長期化に伴い、子どもたちの置かれた状況も昨年以上に厳しくなっており、そのため子どもたちの言動がときに荒々しくなることがあるということを、初日のオリエンテーションのときに耳にした。子どもたちの気持ちを真正面から受け止められるのだろうか、そのような心配がよぎったことは否めない。学生の中にも同様の思いがあったように思われる。そして2日目、がんご屋の子どもたちとのプログラムが始まった。事前にポスターで告知されていたものの、本当に集まってくれるだろうか、という思いがフタをあけるまではあったが、ほどなくそのような不安はかき消された。一人二人と子どもは集まってきた。それを待ちかまえる柳城の学生たち。子どもと学生の楽しそうな声に、また新たな子どもが集まり、集会所、広場（駐車場）はにぎわいの場となっていった。

がんご屋の子どもたちとのプログラムは、A日程の主要な部分でもある。二日間の出会いのなかで、「柳城のお姉さんと夏休みの宿題をやろう」というひとつの目標が、どれほど達成できたかはわからない。ただ、ここに集まってきた子どもたちの笑顔はとても輝いていたし、その子どもたちと交わる柳城の学生の顔もそれに劣らず輝いていた。みんなでサッカーやキックベースやドッジボールをすることに真剣だった。そこでの柳城生は、被災地にやってきたボランティアの大学生というよりは、目の前にいる子どもたちとの出会いを心から受け入れて交わるお姉さんたちそのものであった。子どもたちとお姉さんの名前（ときにニックネーム）がそこでは飛び交っていた。お互いの顔がみえる出会いと交わりがそこにはあった。

仮設住宅に住んでおられる方々は、わたしたちが知らない、ときには想像できないさまざまな体験や思いを持っていることは確かである。わたしたちはそのようなことを察しながらも、一人ひとりと向き合いながら交わりを深めていく。目の前の相手を大切にしようとするときにわたしたちの中で必ず働くこのような関わりが、これからも東北と柳城との間で続いていくことを、わたしは心から願っている。

発行日　2015 年 3 月 16 日
編　集　名古屋柳城短期大学　キリスト教センター（宗教委員会）
発　行　名古屋柳城短期大学
〒 466-0034
名古屋市昭和区明月町 2-54
TEL　052-841-2635（代）
FAX　052-841-2697
印　刷　株式会社　一誠社